

## 目 次

### ファイナルファンタジーV 第一部

#### 四つの心

序章 精霊の行方 .....	7
風——探求——	
第一章 風来坊 .....	19
第二章 かけら .....	42
第三章 旅立ち .....	54
第四章 妖 女 .....	68
水——いたわり——	
第一章 飛 竜 .....	79
第二章 眠りゆく水音 .....	86
第三章 秘め事——絆—— .....	92
炎——勇気——	
第一章 陰謀ね .....	105
第二章 燭——記憶のゆらめき—— .....	122
土——希望——	
第一章 影遊び、月の下で .....	141
第二章 夢から醒めた街 .....	150
第三章 父の背、母の胸 .....	184
終章 遙かなる故郷 .....	194
あとがき .....	196

1992年発売のスーパーファミコン版ファイナルファンタジーV  
及び1996年春に入手できた情報を基にして作品の設定を組んで  
おります。

そのために、現在公式発表されているキャラクター名と相違などが  
一部ございますので、あらかじめご了承ください。

2011年 2月 森宮・記

ファイナルファンタジーV 第一部

# 四つの心

希望は大地に恵みを与え

勇気は炎を灯らせ

いたわりは水を命の源とし

探求は風に叡知を乗せる……

序章 精霊の行方

一 ナーム先すら見えぬ程に立ち込めていた朝霧のヴェールが、東からの風に煽られて、大気に溶けるかのように消えてゆく。

〈翼を広げる飛竜〉の紋章が刺繍された白い旗が山々の向こうから差し込む陽光の中に翻り、縹色と金色の糸で描かれた彼は今にも飛び立ちそうさだ。

エルナンド大陸南部——。

四方をクレアス山脈に守られ、幾重にも連なる森に抱かれた大陸最大の街——タイクーン王都。

そのほぼ中央に位置する王城の、飛竜の塔と呼ばれる天守閣で、主の足音を聞き分けた彼はゆっくりと臉を開いた。

大きな翼を広げて鳴く様は、旗の紋章とそっくり同じ。

ヒュルウ：キュルツ！

ヒュルウ：キュルツ！

ヒュルウ：キュル……ッ！

飛竜の声がこだまして、都中に響き渡る。

「起きていたか、ユグシール」

よく通る、落ちついたテノール。

人に聞かせるための響きを持つ声音。

彼の名を呼んだのは、アレクサンダーハイウィンド。

ユニシア王朝第十六代国王——現在のタイクーン国王である。王は柵から黒革で作られた巨大な鞍を取り出すと、慣れた手つきでユグシールに着けてゆく。

鞍のベルトをすべて締め終えた彼が飛竜の鼻先を撫でた時、急いた様子の足音が聞こえて一人と一頭は振り返った。

硝子張りの扉が開かれる。

白い頬を上気させ、息を切らせた少女が姿を見せた。

「お父様！」

少女は大きく息をつくと、アレクサンダーに駆け寄り長身の彼を見上げて言った。

「風の神殿に、行かれるおつもりですか？」

「レナ：」

「……ここ数日、風の様子がおかしいのは私にも感じられます。

——ですが……お願いです、どうかおやめになってください！

……ひどく、悪い予感がするのです……！」

ユグシールは大きな瞳をゆっくりと瞬いた。

少女の名は、レナシヤルロット。アレクサンダーの愛娘。

ヴェリアン・ファティル・ラ・エルナンド——エルナンドの白き睡蓮——と謳われる、美貌のタイクーン王太子。

あと二月で十九歳の誕生日を迎える彼女は子供の頃から勤よく、特にタイクーン王家が仕える風のクリスタルに関して、神殿の最高神官でもある父王を凌ぐほどの牙えを見せる。

そのレナが、強い不安に怯えている——徒事ではなさそうさだ。

「レナ：落ち着いて聞きなさい」

淡々と、王は告げた。

「先刻、風の神殿より知らせが届いたのだ。

『今月の二日からクリスタルの増幅装置が異常値を示し始め、緊急に増幅を停止したものの、数値が上昇を続けている』と」

「！……何ですって……!?」

王女の深緑の瞳に緊張の閃光が走る。

「ロンカ帝国が減んでからそろそろ五百年が経つ……おそらく、クリスタルは変動期に入ったのだろう」

クリスタル——世界の礎いしづえにして、四大元素を司つかさどるもの。

古き時代よりタイクーン王国は風のクリスタルを、ウォルス王国は水のクリスタルを、カルナック王国は火のクリスタルを、そして今は無きロンカ帝国は土のクリスタルを、祀り、守護し、ある時は政治に利用してきた。

約五百年の周期で変動を繰り返し、その度に天変地異を引き起こして、栄えた文明に奢おごる人々を肅清しよくせいする——王家に伝わる文献にはそう綴つづられている。

クリスタルの変動期——それは、国の存亡の機をも意味する。

前の変動期では高度な文明を誇った彼の帝国が滅亡し、その混乱の中で、多くの人命と共に知識や技術、魔術が失われた。

「レナ。私は神殿に赴き、クリスタルを鎮めてくる。ロンカの二の舞を、このユニシアの世で演じるわけにはいかぬ。

ウォルス、カルナックの両国に私の名で増幅装置一時停止の

要請を出した。シドゥーブリーヴィア博士は一月も経たぬうちに神殿へ来るだろう。

——しばらくは戻れそうにない。私のいない間、政まつりごとは総ておまえに任せる。……頼むぞ」

驚きのあまり言葉を失ったレナの頭に、そっと、手を置く。

「……次代の女王とある者が、そんな不安そうな顔をするな。それでは臣下が迷惑うだけであろう？」

それに、私も安心して行けぬぞ？

言い添えて、アレクサンダーは微笑んだ。

「お父様……」

父につられてか、レナの表情が少しだけ和らぐ。

王は娘の頭をぼんと軽く叩くと、ユグシールに飛び乗った。

「もう行かねばならぬ。

レナ、頼んだぞ……!」

ヒュルウキユル!

ユグシールはひとつ鳴き、翼を広げ力強く羽ばたいた。

床を蹴って浮上する。

大気の流れに、乗る。

ユグシールの翼が起こした風の中、レナが薄絹のシヨールを押しえながら言った。

「お父様、お気をつけて! ユグシール、おまえも……!!」

飛竜の鳴き声が三たび響き渡る。

王女は手を祈りの形に組みながら、遠ざかってゆく父と飛竜を見守っていた——。

十

エルナンド大陸はその名のごとく輪エルナンドのような形状を成している。

輪の内側、中央を南北に縦断する陸地で二分された広大なる内海——エルナンド双内海。

その西側の北部、風の神殿から少し離れた海上。

薄明前の頃、海岸近くに錨を下ろした——密輸船。

船は嵐に備えて海岸線沿いに移動していたが、ゆみはり月が東南東の空で白金の輝きを放つ静かな刻ときである。

見張りの者さえ、うつらうつらと舟を漕いでいた。

……ゆら……ゆらゆら……

波と夜風に揺れる船は、大きなゆりかご。

……ゆらゆらゆら……ゆら……

蒼ざめた水面に浮かぶ。

——……ゆらゆら……——どォンッ！

前触れもなく、船底の方から突き上げるような強い衝撃。

間髪を入れずに船が動き出した。

「な、なんだ!？」

岸辺から遠ざかってゆく。錨が下りているにもかかわらず。

「どうしたんだ、おいっ!？」

船室から船員達が次々と飛び出してきた。

密輸船は並々ならぬ速さで沖へ走る——まるで船自体が意志を持ったかのように。

「くっ……舵がきかねえ!」

苛立った船長のアランが舌打ちし、拳を舵に叩き付けた。

「何が起きてんだ! 畜生っ、こんなことは初めてだぞっ!」

——さてよ? アランはふと、動きを止める。

どっかの港街で、これと同じような話を聞かなかったか?

記憶をたぐり寄せながら進みゆく先に目を向けると、月を背

にした船が一隻、冷たい光を受けて漂っていた。

「あの船……帆がない!? ……そうだ、この手口は!」

——全員、急いで武装しろ! 海賊だ……シエルウィズだっ!」

船上が一気にざわついた。

「——シエルウィズ!? タチが悪すぎるぜっ!」

「あの野郎、いったい何処から嗅ぎつけやがった!？」

大砲を打ち込む余裕はなかった。

瞬く間に密輸船が海賊船の横に並ぶ。

うおおおおおお——っ!!

闇を引き裂く闇とまの声を上げた海賊達が船になだれ込んできた。

にわかに戦闘が始まった。

銃声とまが轟く。

致命傷を負った男の断末魔の叫びが上がる。

刃まぜの響きと野太い咆哮が飛び交う中、アランはサーベルを抜き放ち声を張り上げた。

「俺の船を襲うとはいい根性だ、ファリス・シエルウイズ！  
てめえの首、このアラン・グノース様がたたつ斬ってやるぜ!!」

——ざんっ……!

アランが言い終えた直後だった。

彼の首から上が、胴体から離れて床に転がる。

切り口から血と体液を噴き出した屈強な四肢が、やや遅れて倒れた。

「……誰が、誰の首を叩き斬るって?」

近くにいた船員達が一斉に声の主を見た。

黒いコートに身を包み、右手に血の滴る剣をさげた若い男。

「ファリス・シエルウイズ……!?!」

「……なんで……ここに……!?!」

賊は船首のほうから乱入してきた。この男が舵のある船尾の、しかも最後部に入り込むなど、……今の時点では不可能はず。

「……おまえ……今どこから現れた……?」

呆然と問うた船員のロバートに、青年は残忍な微笑で応えた。

……その妖しくも凄絶な美しさは、例えて云えば、悪魔。

あるいは——死神。

ファリスは言った。

「……知りたければ——レーヌッドウーラに訊くんだ、な!!」

生首を蹴り飛ばす。

ロバートの顔面に、直撃!

「うぎゃあッ!?!」

ロバートは何事かを叫びながら顔に飛び散った生暖かい血を必死に払いのける。常軌を逸して闇雲に駆けずり回り、つまづいて海に落ちたまま上がってこなかった。

その時にはファリスは他の船員達に攻撃を仕掛けていた。

細身の剣が閃く度に悲鳴が上がる。

刃が肉を食らう度、剣の鏢に象嵌された毒々しいまでに赫い寶石が鮮血を嘔る。

やがて累々たる羶の山を作り上げたファリスは、甲板中央で手をこまねいている手下のもとへ駆けた。

……さながら新たな獲物を求める狂戦士のごとく。

今年に入った頃から双内海の東西を繋ぐトルナ運河に魔物が出没するようになり、タイクーン国によって運河の門が閉ざされたのは三カ月前のこと。

だが、中央エルナンドの主要な二つの港街——双内海東側に面したオレイヴと、西側に面したハーネイダムの間は平坦な道程で、街道もよく整備されていたこともあり、商船や密輸船、それらを狙った海賊船は、変わることもなく頻繁に航行していた。東エルナンド中部の港街カーウエンの成金が、隣のラベンナ大陸のカルナックに住む巨匠に、水のクリスタル創造主の彫像



を純金で造らせた——という情報を手した海賊の頭領ファリスは、かの像を乗せてハーネイダムへと向かう途中の船を襲った。——先刻の略奪がこれである。

戦利品を海賊船に積み終えて、樽の上に腰掛けたファリスは香り高い酒で満たされたグラスを片手に、像の納められた箱の嚴重な梱包に四苦八苦している部下達を眺めていた。グラスを傍らに置き、項に手を回して髪留めをはずす。

潮風に、癖のある長い金髪がゆらめく。懐から紙巻き煙草を取り出し、一本くわえた。火を点けて、潮の香りと一緒に吸い込む。

ヒュール……

明え始めた東の空、北へ向けて、翼ある者が飛んでゆく。

「タイクーンの飛竜か……」

……ヒュール……

北の陸地に近づくにつれ、飛竜の高度が下がっていった。

その先には、風のクリスタルが祀られた“風の神殿”がある。何気なく飛竜の行く手を見やり、やがて短くなった煙草を指で弾いて海に捨てた。と。

「な、なんだこりゃあ?」

賊達の間から、爆笑の渦が巻き起こった。

「こんな不細工なレーヌドゥーラ、見たことないぜ! 見ろよ、このつり目。まるで狐だ!」

「あ、この女、確かあの成金じじいのカミさんだよ!」

「じゃ、そいつをモデルにこの像を造ったつてのか。……頼まれたダークマローウも気の毒だよなあ!」

「気の毒なのはレーヌドゥーラのほうさ。なんたって天界一の美女! ……だぜ? こりゃあほとんど冒瀆だ!」

ファリスも梱包の解かれた今回の主役の像を目にする。途端「傑作……!」

腹を抱えて笑った。

「最高じゃん、これ! 唯美主義のブラッシーが見たらその場で昇天するだろうけど。——売り飛ばす前に見せに行くか?」

「ブラッシーの旦那の棺桶を用意して、ですかい?」  
船は再び爆笑に包まれる。

——と。

ゴオオ——オ……

北から、唸るほどの強風が吹きすさんだ。

海賊船が激しく揺れる。

「——すっげえ風だなあ。こりゃあ、風のクリスタル創造主が怒ってるぞ!」

「火のクリスタル創造主にも、この像、見せに行ってみるか?」

「世界中が大火事になるぞ。双児の妹が凌辱されたよ! なモンだしなあ!」

賊達が戯言を交わす中で、——しかし、ファリスは。

「お頭……?」

ひとり、端正な貌に険しい表情を浮かべ、

「どうしたんすか？」

宙の一点を凝視していた。

—— 船の揺れがおさまった頃。

ファリスが、ぼつり、と言った。

「風が……止まった——」

海賊達は初めて気づいた。

止むことなどないはずの潮風が、全く感じられないことに。

—— 鏡面のごとく静まり返った、海面に……——。

十

その部屋は床も壁も天井も、むき出しの岩で造られていた。年の頃は六十ほどの男が、床の中央にはめ込まれた板を見つめていた。

淡い点滅を繰り返していた板が一瞬、強い光を放つ。刹那、

ガクンっ！

上下に、左右に、部屋全体が激震のように揺れる。

「う……っ！」

背中を壁にしたたか打ちつけて、男はうめいた。

口の中を切ったのだらう、唇の端から一筋、血が流れる。

だが彼には、それを気に留める余裕などなかった。

「……もしや、風のクリスタルが!?」

……頼む、間に合ってくれ——!!」

男の祈りを聴いたものは、いない。

十

レナが不可解な戦慄に全身を貫かれて目を覚ましたのは、空の端が白み始める頃だった。

それからおよそ一刻の間、レナは飛竜の塔へ昇り、北の果てに思いを飛ばしていた。

父が死んでから、今日で七日。既に神殿へ着いているはず。

……クリスタルがどんなに不安定な状態になっても、お父様の力をもってすれば、必ず落ち着くはず。

頭ではそう思うのだけれど。

風霊達が、妙に騒がしい……。

風に対して鋭敏な彼女が感じる異変は明らかに不吉なもので、胸に闇色の不安がわだかまる。

「レナ様」

乳母のジェニカが、いつの間にか後ろに控えていた。

「朝食のお時間でございますよ」

レナはかぶりを振った。

「……食べたくないわ」

「姫様……」

ジェニカが溜息をつく。

「ここ数日、御自分が何を召し上がったか憶えておられますか？」

果物とチーズを、ほんの少ししか口になさってないのですよ。

……それではお体に障ります。姫様が御心配になるのはよくわかりませんが、お食事だけは、きちんと召し上がって下さいな」

「ジェニカ……」

嘆くように言う乳母に、王女は一瞬、途惑いを覚えた。

食欲など皆無である。だが生まれた時から自分の成長を見守ってきてくれた初老の婦人に、これ以上心配をかけたくない。

……粥のようなものなら、何とか喉を通るわよね。

そう思い、ジェニカに微笑みながら告げた。

「――部屋に戻るわ。食べやすいものを、持ってきてくれる？」

ジェニカが安堵したように息をつき、

「すぐにお持ちいたしますわ。オートミールになさいます？」

それとも、お粥？」

「そうね……卵のお粥がいいわ」

――その瞬間だった。

王宮の庭の鳥達が一斉に飛び立つ。

王女と乳母がはっとする。

遙か北から、狂おしく唸る風が吹きつける。

「きゃ……っ！」

レナがジェニカを庇いながら、空を見据えた。

風が止む。

風霊達の気配が急激に弱まる――かき消えるように。

レナの顔から血の気が失せた。

「……風が止まった――」。

――！！ お父様!!」

「あっ、レナ様!？」

王女は階段を駆け降りる。

十

時は強風の前に遡る。

アレクサンダーが風の神殿に着いて最初に見たものは、救護室に運び込まれる重傷を負った神官の姿だった。

「何事だ!」

技師と神官達が、アレクサンダーの声に振り向いた。

「国王陛下……!」

――事態は、想像以上に切迫していた。

「陛下、つい先程、増幅装置がクリスタルの暴走に耐え切れず、

爆発した由にございます!!」

「――!!」

「もはや我々の手には負えませぬ。……このままでは……このま

まではクリスタルが……!」

「陛下……どうかクリスタルをお鎮め下さい……!!」

……彼らの“タイクーン国王”を見る眼差しは、救世使への悲願に似ていて、アレクサンダーは憤った。――自分自身に。

……それほどまで暴走したクリスタルなど、俺ひとりの力で

は、無理だ……!

しかし、一刻の猶予もない。

王は広間を見回し、神殿警護の者であることを示す白銀の鎧を纏った壮年の男の姿を見分けると、

「——サウシエス伯! そなた、今すぐユグシールを飛ばし、王女を呼んでまいれ。よいな!」

「御意!!」

命じて青いマントを翻し、走った。風のクリスタルを祀つてある最上階の祭壇へ。

危険すぎると思うが——、……初めから、レナを連れてくるべきだった……。

レナの神官としての才能は、自分を遙かに上回る。常であっても精霊の気配を王より敏感に感じ取るのだ。

だが、万が一クリスタルが破壊的な力を発したときのことを考えて、世継ぎの娘は城に置いてきた。それは変え難い事実。果たしてレナが着くまで、持ちこたえられるだろうか——?

……幾つもの回廊を抜け、階段を昇り、辿り着いた祭壇の間の扉を祈る思いで開いた。

まさにその時。

——ピシ……つ

氷が融けるときのような、涼やかな音がした。

「な、なに!」

中央の祭壇の上に浮かぶクリスタルに、大きな亀裂が走る。

考える暇はなかった。

古い時代の言語で〈鎮静〉の呪言を唱える。

——が。

部屋中の空気が、総てクリスタルに引き寄せられる。

クリスタルは風を吸い込み、エナジーを内に収束させ、

——限界はすぐに訪れた。

冷たいグラスに煮え立つ湯を注いだ時のように、クリスタルのあらゆる箇所にはびびが刻まれる。

エナジーが、一気に放出される!

飛び散るクリスタルの破片。

腕をかざして守りの体勢をとった王の全身に、容赦なく突き刺さる。

風の刃が彼を切り裂く——。

……次第に失われゆく意識の中でアレクサンダーは、誰かの哄笑を聞いたような気がした。

——どす黒い、闇の気配を持つ者の——  
……

ユニシア暦四七七年

乙女の月三日 聖杯一九の刻

風のクリスタル 崩壊

風

探求

《精靈<sup>リリット</sup> シルシノン》

風のクリスタル創造主。

まれに人、鳥等の姿を取ることもあるが、  
もとは姿なき風霊である。

多くの画家は、実体化した姿を

青年、もしくは鷹<sup>トカ</sup>として描くことが多い。



## 第一章 風来坊

干し肉を焚火で軽くあぶってかぶりつき、香ばしい匂いが口の中いっぱい広がったところで葡萄酒をぐいっと流し込む。さつき釣った魚が頃合よく焼けて、頭からばりばり丸かじり。

豪快な食べっぷりを見せる連れの青年——バツツの傍らで、草をはんでいたチョコボは呆れたようにクエー……と鳴いた。

人間の言葉に直せば『毎度のことだけど……こいつ、どういう胃袋してんだ?』——といったところだろうか。

「ん? ボコ、おまえも食うか?」

チョコボはかぶりを振った。

「雑食性のくせに、好き嫌いの激しい奴だなあ」

言いながらバツツは、じーっとボコを見て、

「……チョコボって、うまいのかな?」

クエエックエーッ!!

食われちゃたまらん! とボコが逃げ出したのも無理はない。

青年の屈託のない笑い声がかぶさる。

「冗談だよ、ボコ! 食わねーから戻ってこいって」

ひとしきり笑ったバツツは、ふと真顔になって辺りを見た。

……おかしい。

青年とチョコボが野営の火を囲んでいることは、タイクーン

王都——デューン・レントからやや西に離れたラメイの森。

朝の日差しの中で伸びやかに枝を広げる楠達が、生い茂った葉の間にクリーム色の花飾りをつけて静かに佇んでいる。

——かさりと、揺れることなく。

くわえていた鮎を飲み込んで、バツツは息をついた。

四半刻前、やたらに強い北風が吹いたつきり……だよな。

バケツいっぱい獲れた川魚を焼こうと、火を起こしていた最中だった。

大地に深く根を下ろした樹木をも倒しかけたあの強風の後、僅かな微風すら吹かなくなってしまったのだ。

「……どうしちゃったんだろう……」

クエー……

恐る恐る戻ってきたボコが、二本の足を折り曲げてバツツの後ろに座る。

バツツは巴旦杏をかじりながら、黄色い体毛で覆われたチョコボの胴にもたれた。が。

クエッ!

「わっ!」

突然、ボコが立ち上がる。体をボコに預けていたバツツは、支えを失って地面に頭をたたか打ちつけた。

「いつてえ……。いきなり立つな! マジで焼鳥にするぞ!」

クエエックエーッ!!

ボコがわめきながら嘴で上を指す。

「え？ そら？」

痛む後頭部をさすりながら、紺青の瞳で空を仰ぐと、青空の  
中で何かがきらりと光った。

「ん？」

……ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオ……  
うなりか地響きか、あるいは両方か。

大地が小刻みに振動し、音が次第に大きくなってゆく。

小さな点だった空のそれが、急速に近づいてくる。

石——いや、岩？

「：隕石!？」

一瞬の出来事だった。

隕石がバツツ達の頭上をかすめ、東のほうの森へ飛んで行く。

どおん——!!

爆音と同時に、激しい地震と暴風!

バツツが手近な樹木にしがみつく。

ボコが揺れと風に耐え切れずに座り込む。

飛んできた小石や木の枝が彼らを打ち据える。

——やああって。

風が止み、次いで揺れが収まっていった。

楠の葉のざわめきが微かなものになり、消える。

呆然と顔を上げたバツツとボコは大きく息をついた。

「何なんだ、いったい……」

クエー……

上空へと逃れていた隣の森の鳥が、一斉にラメイの森へ降り  
てきた。

さえずる鳥達の中の一羽が、バツツの肩に留まる。

バツツは指先で肩の鳩を撫でながら立ち上がった。

崩れた薪まきの残り火を踏み消し、離れたところに転がったバケ

ツを取り上げる。

ボコが皮袋をくわえてバツツについてきた。黄色い巨体に驚

いた鳩が飛び立つ。

皮袋を肩にかけ、ボコに飛び乗ったバツツは、手綱を握って

ボコの腹にあぶみをくれた。

「とにかく……行ってみよう!」

クエツ!!

青年を乗せたチョコボが走り出す。

ちらり、とバツツは後ろを振り返った。

薪の火、……ちゃんと全部消えてるよな……。

十

隣のイシューヌの森は、ひどい有様だった。

木々が根こそぎなぎ倒されて、辛うじて立っている樹木も押

せば倒れてしまいそうな程にぐらついている。

折り重なって倒れた木の上を、ボコは器用に歩いた。

——と。

目の前を白い馬が横切った。

一目で高価なものとかわかる鞍を背負った白馬は、誰かを捜すように辺りをうろつく。

「さっきのショックで、ご主人様とはぐれちゃったのか。…!？」

ツツジの低木が成す天然の垣根の向こう、草一本、小石一つ残さずに広がるむき出しの地面。

そこに、淡い黄色の薄手のマントを纏った少女が横たわっていた。

そして森の奥から現れた、土色の肌の生き物が、二匹。

…ゴブリン!!

二匹のゴブリンが、少女に近づく。意識のない彼女を持ち上げ、連れ去ろうとしていた——!

考える間もなく、バツツは背中の中の剣を抜いた。

「はっ!」

かけ声と共にボコの上で弾みをつけて垣根を飛び越える。

大振りの剣が陽光を映してぎらりと光った。

「ギャ!？」

「グギャツ、ギャギャツ!」

突然現れたバツツとぎらつく刃に、ゴブリン達は驚いて少女を放り、一目散に逃げ出した。——ゴブリンは凶暴だが臆病な生き物なのだ。

バツツはほっと息をつくると剣を鞘に納め、少女に駆け寄った。華奢な肩に腕を添えて抱き起こし、——目を睜く。

白百合か純白の睡蓮を想わせる、清楚な美貌。

柔らかな、灰色を帯びた金髪。伏せられた瞼に陰を落とす、長い睫毛。サクランボのような唇。細身ながらも豊かな胸と腰。

そして、透き通るように白い肌——。

純血の南エルナンド人だ。…ってことは……。

そういえば、彼女の身につけている服や装身具は、どれも高価な物ばかりだ。

タイクーン貴族のお嬢様、か——。

「う……」

少女が小さく呻いて瞼を開く。その瞳は、森の恵みを凝縮したかのごとき、深い緑色。

「……?」

焦点の定まらない目で視線を彷徨わせていた彼女は、バツツを見て虚ろに呟いた。

「誰……?」

「俺はバツツ。——大丈夫か?」

「バツツ……?」

途切れそうになる意識を引き戻すかのように、少女はかぶりを振った。

瞬きを繰り返し、

「——!」

自分が見知らぬ男の腕の中にいることに気づいたらしく、慌てて身を起こした。

少女の唐突な行動に少し途惑ったバッツは、ぼかんと彼女を見つめる。

「あ……」

はっと我に返った少女が、きまりの悪そうに頬を染めて言った。

「……ごめんなさい。驚いたりして……。ええと、バッツさん……だったかしら……」

「バッツでいいよ。——君は？」

「レナです。……あの……、私、どうしたのかしら？」

「憶えてないのか？」

「ええ……」

レナは辺りを見回した。すり鉢状にえぐれた地面の中央の、小さな山小屋ほどの大きさの岩を見て、あっ……と小さく叫ぶ。

「……そうだわ。あれが突然、空から降ってきて……爆風で飛ばされて、気を失って……」

「隕石か？」

「隕石……？」

バッツはこくりと頷いた。

「ああ。ラメイの森で朝飯を食ってたら、いきなり頭の上をすっ飛んでってさ。……隕石なんて初めてだから、見に来たんだ」

——だがレナは、隕石を訝しげに見つめていた。

「隕石……風が止まったのと、何か関係があるのかしら……？」

「レナ？」

「……あ。ごめんなさい、気にしないで。……バッツ、あなた……旅の方に見えるけど、どちらへ？」

「あてなんか無いんだけどさ。……久々にデューン・レントにも行ってみようかと思って」

レナが穏やかに微笑んだ。——まるで、天使のように。

「デューン・レントはいい所よ。ゆっくりしていらしてね」

「そうだな。物価は安いし、食いもんは旨いし」

その時。ツツジの垣根の向こうから顔を覗かせた先程の白馬が、ヒヒインと嘶いた。

「ラクール！」

レナに名前を呼ばれた白馬は、レナの元へ駆けた。

ラクールの頭を撫でながらレナは、ふと、隕石のほうへ目をやった。

「ねえ……あの……人……」

「え？」

六十歳位の白髪の老人が、隕石に手をつけて体を支えながら、よろよろと歩いていた——額から血を流して。

「う……」

がくり。老人が力尽きたように倒れる。

「おじいさん！」

「じいさんっ、おい、しっかりしろ！」

老人に駆け寄るバッツとレナ。

レナは、その額の傷を見て、すっと手を当てた。

……レナの周りの空気が、急速に澄んでゆく。

淡く白い光がレナの掌てのひらに生じ、彼女は小さく唱えた。

「……ケアル……！」

老人の傷口の血が止まり、肉が盛り上がり、やがて跡を残さずに傷がふさがっていった。

白魔法……回復魔法だ……！

バツは目を瞬瞬いた。いくら世界が広いとはいえ、魔法を使える人間がどこにでもいるというわけではない。

「レナ……魔法が使えるのか!? すごいな……」

レナは少し笑って言った。

「ごく初歩的なものなら、ね。——このおじいさんに生命力がなければ、こんな子供だましよ。」

——おじいさん? しっかりして」

レナが老人の血を拭ぬぐい、その頬をびたびたと軽く叩く。

「……う……」

老人が呻うなきながら目を開けた。

「……? どこじゃ、ここは……うっ、あたまが……」

「額にケガをしていたのよ。もう治したから安心して。それから、ここはデューン・レントの近くの森よ」

「デューン・レント……?」

「タイクーン王都さ」

「タイクーン……?」

老人は首を傾げるばかり。

「おい、じいさん。……大丈夫か?」

必死に頭を働かせようとする様子の老人は、突如たちまち、愕然がくぜんとした。

「ありゃりゃ……どうしたんじゃ……?」

「おじいさん?」

「思い出せん……何も思い出せんぞ!!」

バツとレナは顔を見あわせた。

「じいさん、頭を打ったショックで……まさか、記憶喪失……?」

老人は頭の中の記憶を探し、思い当たったように言った。

「……ラ、フ……。……ん! そうじゃ、わしの名はガラフじゃ!」

「他には? ゆっくり考えてみて」

優しく告げるレナに、ガラフは再び記憶を辿たどる。だが……

「……だめじゃ……名前以外のことは何も思い出せんぞ……」

溜息がもれた。

ガラフの身なりは決して悪くない。この温暖な南エルナンド地方の者にしては厚地の服を着ているが、質のよい生地で仕立てられている。

顔立ちや体つきからいって、隣のラベンナ大陸の遙か南、ジャコールあたりの戦士のような気はするが、少し違う気もする。

と。

ラクールがレナのマントを口でひっぱった。

失念していた、というようにレナが言った。

「あ……ごめんなさい、私、急がなければならなかったの」

レナは服についた土を払い、ラクルの鞍のあぶみに足を掛けてひらりと跨またがった。

「どこへ行くんだ？」

「——風の神殿へ……」

ガラフが瞠目して立ち上がり、

「風の神殿！ わしもそこに行かなければならなかったような気がするぞい！！ わしも行くぞ！」

馬上のレナは少し困ったように眉を曇らせた。

「でも……」

ガラフはレナの手を取り真剣な目で訴えた。

「行かねばならんだ。頼む、連れて行ってくれ……!!」

レナは、仕方ない、というように微笑んで頷いた。

「じゃあ、後ろに乗って。」

バツツ：あなたは？ あてのない旅なら、一緒に……」

バツツは首を横に振った。

よっこらせ、とガラフが馬に乗る。ガラフが具合のいい位置に座るのを確認すると、レナはバツツに言った。

「ありがとう、バツツ」

「何が？」

「私の街を誉めてくれて」

バツツは笑った。

「世辞が言えるほど、器用じゃねーよ。」

——じゃ、元気でな。気をつけてけよ」

「ええ。さようなら……!!」

「さらばじゃ、バツツ！」

——遠ざかって行く馬と二人を見送りながら、バツツは腰に結んだ小さな袋に触れた。

三年前、病で逝った父の遺髪が入った、形見の袋——。

北エルナンドの山脈に囲まれた、風の神殿。その山を越えた所には、生まれ故郷のリックス村がある。

——もう少し、気持ちの整理がつくまで、北エルナンドには行きたくなかった……。

ツツジの木陰で眠っていたボコを（昼寝というか朝寝をしていたのだ、この鳥は）たたき起こすと、バツツ達は森を抜け、街道に出てすぐの、デューン・レントの街門をくぐった。

レナ——あの美少女の、レーヌドゥーラを想わせる優しいげな笑顔を想い浮かべながら。

十

「ねえ、ご一緒していいかしら？」

夕食時。酒場で鳥肉の照り焼きをほおばっていたバツツは、二人組の娘に声をかけられた。

彼女達は、街娼にしては健康的で、遊び好きな町娘なのだ

バツツは思った。

二人ともなかなかの美人である——今朝出会ったレナに比べれば、足元にも及ばないが。

バツツは照り焼きを飲み下すと、

「ああ、そっちに座れよ」

言って給仕を呼び、彼女達の飲物を注文した。

女二人におごる程度の金なら余裕で出せる。

ひとりで黙々と食べるより、可愛い女の子と一緒に食事するほうが楽しい。

「ありがたい。あたしはレナルルーテ。こっちはラウサリサよ」

レナにサリサ……か。

「姉妹か？」

ラウサリサがかぶりを振る。

「ううん、同じ年の幼なじみ。十八よ」

「姉妹みたいに育ったんだけどね」

そう言つて二人はくすりと笑つた。

レナとサリサ——タイクーン国内の二十歳以下の娘でこの名を戴く者は少なくない。愛称まで含めれば、約三分の一の娘達がこの名前の持ち主だ。

その由来は、今年十九歳になる現王太子レナロットと姫と、生きていれば二十歳になる、十四年前に船から海に転落して行方不明になった第一王女サリサロット姫にある。多くの親達が、ユニシアの世の主力国家タイクーンの姫君方

にあやかつて、自分の娘に名付けたのだ。

そういえば、今朝のあの娘も『レナ』だったよな……。

「俺はバツツ」

名乗つてバツツは香酒を口にした。

「ね、バツツはどこの人なの？ 王都の人じゃないわよね」

「——旅の人」

軽い冗談——事実ではあるが——のつもりで言うのと、たちまち二人が笑い出した。

笑っている女の子は、いい。

美人なら尚更だ。

「面白い人！ 見た感じより、ずっといいわ」

「どーゆー意味だ」

「ふふっ。あのね、さつきからサリサと二人で話してたのよ。

『あの人、かっこいいけど、ちょっと近寄りたいていうか、どっつきにくそう』って」

……まあ、よく言われることではある。

バツツは少しだけ遠い目をした。

寡黙な親父と、ガキの頃から二人旅だったからなあ……。

そう思いながら、今日の自分はやけに感傷的になっていることに気づいた。

この二人と遊んで、気イまぎらわそ。

「……好きなモン頼めよ。おごるぜ」

「きゃあっ、ありがとう♡」

「すみませーん。この牛レバアの香草焼きと、特製サラダと、ほうれん草のグラタンをお願ひしまーす！」

酒場を出たあと、舞踏場へ踊りに行き、彼女達と別れて宿屋に戻ったのは日付が変わる頃だった。

ベッドに横になったバッツは、なかなか寝つけなかった——  
体は疲れているはずなのに、

気に、なるのだ。

今朝のレナのことが。

「……風の神殿に行くって、言ってたよな……」

風が止まり、おそらく船は動かないだろう。となると陸路で向かうことになる。

しかし、エルナンド大陸の西側、特にデューン・レントから風の神殿へ行くために經由しなければならぬトゥール村へ通じている山間やまわは、街道として整備されてはいるが、死デスバレーの谷デスバレーと呼ばれていて、ゴ布林等の魔物が多く出没する地域なのだ。

心配に、なってきた。

「女の子とじいさん、だしな……」

バッツは窓の外に目をやった。  
昇り始めた月は、銀を帯びたレモン色で、レナの胸元を飾っていた装身具を思い出させる。

……夜が明けたら、あの二人を追いかけてよう。そして二人を

神殿まで送ったら、そのまま街道を引き返してラベンナ大陸へ渡ろう。

そうは決めたものの、何かに呼ばれているような気がしてならなかった。

風の神殿——それが、何かの鍵を握るようで。

十

バッツを乗せて全力で走っていたボコが、地震の前兆に気づいて止まった。足を折り曲げて座り込む。

死の谷の大地が揺れた。

きのう隕石が落ちてから、三十八度目の有感地震。

今回ののは、かなり大きい。

「きゃ——!!」

「うわあっ!!」

北のほうから少女と老人の悲鳴が聞こえた。

「あれは……レナとガラフ！ ボコ、行くぞ！」

クエツ!!

無事でいろよ！

祈る気持ちで、まだ揺れの収まりきらない大地を駆けだした。

途中で襲ってきたゴ布林共をなぎ払い、陥没した道を飛び越えて、——馬から放り出されて倒れているレナとガラフを……

見つけた！



「レナ！ ガラフ！

……ちつ、またゴ布林かよ！」

バツはボコから飛び降りた。

さっき斬ったゴブリンの血に塗れた剣を、またしても現れたゴ布林達の腹に叩き込む。

「グギャア！」

「ギャア!!」

ゴブリンの耳障りな断末魔の叫びを無視して、バツはレナとガラフをボコに乗せると、レナの白馬——ラクールを捜した。  
「ラクール！ ラクール!!」

「ヒヒイン……」

少し先の崖がけのそばからラクールの弱々しい鳴き声が聞こえる。

——その足からは赤い血が流れ、不自然な方向に曲がっていた。  
レナなら治せるかもしれない。

ひとまずラクールの横に行き、レナ達をボコから降ろすと草の上に寝かせた。

手拭いで剣の血を拭っていると、

「……ん……」

レナが、意識を取り戻した。

「バツ……!!」

「よう！——大丈夫か？」

「ええ。……助けてくれたの？」

「ま、成りゆき上、な」

レナは居住まいを正すと、頭を下げた。

「ありがとうございます……!」

バツは照れて頭をかく。

「おいおい、よせよ。——それより……」

「ついで、とラクールを指さした。

「あいつ、治してやってくれないか？」

「え？……!! ラクール!!」

レナの顔がたちまち蒼ざめる。

「ひどい傷……! 待ってて、すぐに治してあげるから。

——バツ。ラクールを、しっかり押さえてくれる？」

言われた通り、バツは白馬の動きを封じた。

レナがラクールの右前足を本来あるべき方向に戻す。途端、

痛がったラクールが暴れようとしたが、バツに押さえ込まれて思うように動けない。

ブルブル!!

不快そうにラクールが鳴いた。

「少しの間だから、辛抱してなさいね、ラクール」

レナが静かな声でそう諭すと、ラクールはおとなしくなって目を閉じた。言葉は通じなくても気持ちに通じるものだ。

昨日ガラフの額の傷を癒したように、レナはラクールの足に手をかざして回復魔法の言葉まじを唱えた。

……その時間が、今回はやけに長い。

レナの額を汗が伝う。

——しばらくして、ラクールの足を完全に治したレナは、ふっ……と倒れそうになった。

「バツツは慌てて腕を伸ばし、レナを抱き支える。」

「おい、どうしたんだよ、レナ！」

レナは完全に疲れきった様子だったが、それでも小さく微笑んだ。

「……大丈夫よ。骨折を治したのは初めてだったから……ちよつと疲れただけ……。ねえ、私より、ガラフの具合は？ まだ意識が戻らないの？」

だが、レナの呼吸は尋常ではないほどに荒い。豊かな胸が、激しく上下に波打っていた。

「レナ……」

レナの言葉に反応したかのように、ガラフが呻く。

「うっ……う……風の神殿に……急がなくては……」

レナが頷く。

「ええ……早く、風の神殿へ行かないと……」

バツツは重く溜息をついた。

風の神殿——風のクリスタル祀られている場所。

……遠い昔、父は言っていた。

『クリスタルだけは、守らねばならない』——と。

それに……。

バツツは、レナの顔をのぞき込みながら言った。

「レナ……やっぱり、俺も行くぜ」

「本当？」

嬉しそうに、レナが笑う。

「ああ。……風が、呼んでいる気がするんだ」

言ってから、気障きざな台詞せりふだったことに気づいてバツツは照れた。が。

「ええ……。シルシノンが、呼んでいるわ……確かに……」

そのまま、レナは意識を手放した。荒かった呼吸が、次第に穏やかな寢息に変わる。

このまま、寝かせておくか。

支えていた腕を外し、彼女を草のしとねに横たえた。

「とかなんとか言って本当は、その娘むすめにホの字じゃないのかい、バツツ？」

突然言われてバツツは心臓がひっくり返るかと思った。

「じ……じいさん、気がついてたのか！」

「ん？ おまえさんがレナちゃんに惚れたことかい？」

「ちーがーうっ!! 意識が戻ったってことだよ！」

「風が呼んでるじゃろ？」

「……」

恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にして黙り込むバツツ。

ガラフが豪快に笑った。

「そうかいそうかい。そんなにこの娘に惚れ込んだんかい」

「だーかーらっ、そうじゃなくて！ ……いや、確かにレナは、どんな男でも一目惚れするほど綺麗だけだよ……違うんだ」

「何が違うんじゃない？」

うってかわって真摯しんしに問うガラフに、バッツはつい素直に、

「……レナとは、初めて会った気がしないんだよ。何でだか知らないけど」

レナと出会った時から感じていたことを口にしていた。

にやり。ガラフが目を細める。バッツははっとした。

しまった！ 言うんじゃないか！！

「運命の赤い糸つてやつかい。おまえさん、つくづく気障な奴じゃのう」

こ…このジジイ！

高笑いするガラフにかなりの憤いきどろりを覚えたが、まともに怒りをぶつければ、さらに茶化されるのは目に見えている。

ここは、忍の一字あるのみ。それしかない。

……口喧嘩はひたすら弱いのだ、バッツという男は。

十

街道を北上すること八日。

トゥール村への道と海への道に分かれるジュラの分岐点。

真つ赤な太陽が、西の海へ沈み始めた頃。

——バッツ達は、困り果てていた。

「まいったな…。トゥールへの道が完全にふさがっちゃった」  
隕石の落ちたショックで、いたるところで崖崩れや地割れが

起きていた。

この分岐も、例外ではなかったのだ。

「どうしようかのう…」

「海のほうへ出て、海岸線沿いに行けないかしら？」

「それは無理だな。…あっちのほうは、歩ける場所がないんだ」

——と。

レナが海を指さした。

「ねえバッツ！ あれ…」

「え？ ……船!?」

他に行き交う船のない紺碧の海原に、ただ一隻ひとすい、南みなへ向かって航行している船があった。

「あの船…風もないのにどうやって走ってるんだ…？」

三人は顔を見あわせた。

だが、現実には、あの船は動いている。これを利用しない手はない。

「あの船の持ち主に頼んでみましょうよ」

「うむ、そうじゃの」

が、バッツは。

「——やめといたほうが、よさそうだけ」

「どうして？」

「見るよ、あの船。岩場の陰に入っていくぞ」

「それが…どうしたんじゃない？」

「この辺りに船を持つてるような村や集落はない。あの船は多

分、海賊船だ。……前に、この近くには海賊共のアジトがあるから気をつける……って行商のオヤジに言われたことがあるのさ」

「――乗せてもらえないかしら？」

レナの言葉にバッツは目を睨った。

……なんてことを言い出すんだ、このお嬢は。

世間知らずにも程がある。

「相手は海の荒くれ者だぜ？ はいどうぞ、って乗せてくれると思うか？ レナなんか、間違いない慰みものにされたあげく売り飛ばされるぞ」

「……」

レナがうつむく。するとガラフが、

「ならば、こっそりと頂くとするか！」

などと言い出したものだから、バッツは再び目を睨った。

「……じいさん……意外と大胆だな……」

「善は急げ、じゃ。行くぞい！」

ガラフはラクールの腹にあぶみをくると、一人でさっさと

海への道を下り始めた。

「善……って、どこが善……なんだよ。おい、待てよガラフ！」

バッツの後ろでレナが言った。

「ね、とにかく行ってみましょう」

やれやれ、とバッツは息をついた。

青年と少女を乗せたチョコボが白馬の後を追って走り出す。

仕方ねーな。

ヤバくなったら……海賊なぎ倒して逃げよう。

「だめだわ……。ここも行き止まりになってる」

分岐から約五ラドゥナム進んだところで、崖崩れが起きていた。

海への道も、ふさがってしまった。

馬から降りて、崖と崖の間に入り込んでいたガラフが声をあげる。

「おい。ちょっと、こっちに来てみい。洞窟があるぞい」

「洞窟？」

バッツとレナもチョコボから降りてガラフのほうへ行き、洞窟をのぞき込む。

「本当……かなり奥まで通じてるわね」

「もしかしたら抜けられるかもしれないな」

バッツはポコにくくりつけていたカンテラを外し、皮袋を肩にかけると、ベルトのポーチから火打ち石を取り出した。

カンテラの蓋を開け、灯心に火を点ける。

「バッツ。ポコとラクールはどうしよう？」

「とりあえず俺達だけで先の様子を見に行つて、抜けられそうだったら、こいつらを連れに戻ればいいさ」

「駄目じゃったら山越えならぬ崖越えかい？」

「……そういうことになるよな、危険だけど」

レナがラクールから荷物を降ろした。

「ボコとラクール、繋がないほうがいいわよね。ゴブリンとかが襲ってきたら逃げられるように」

「ああ。」

じゃ、ボコ。しばらく待ってろよ」

「ラクール、すぐに戻って来るからね」

クエツ

ヒヒーン

一羽と一頭が足を折り曲げて座った。

三人は、カンテラの灯りを頼りに洞窟の中へ入ってゆく――。

奥のほうから岩に釘か何かを打ち付けるような音が聞こえた。  
男の話し声も聞こえる。

「こんな感じでいいな。こっちはこのレバーを下げれば……  
よーしよし、ちゃんと開くぞ」

「しっかしよお、何でこんな洞窟と繋がっちゃったんだ？」

「ゆうべのでっかい地震のせいだよ。……さあて、お頭に報告して、酒でもくらって……リチャード、チェスやらねーか？」

「おいおい、ビリー、勘弁してくれよ。俺も可愛い嫁さんとつもるナニがあるんだぜ？ もータマっちまってよ」

「ちえつ。いいよなー、妻帯者って奴はよ。……あーあ、俺も早く結婚してえなあ。娼婦ばっかじゃつまんねーよ」

岩同士がぶつかる音がして、男達の声が聞こえなくなる。

……どうやらこの洞窟は、海賊のアジトに直結しているようだった。

バツ達は奥へ進み、男達の言っていたレバーを見つけると、ぐいっと下げてみた。手応えが、かなり重い。

鎖のジャラジャラという音と滑車が回る音がして、洞窟の壁だと思っていた岩が上に持ち上がる。

バツはレバーを固定した。

「ほう……海賊もなかなか芸の細かいことをするのう」

「男の力でなきゃ開けらんねーけどな。あ、どうせ男はっかかりだろからいいのか」

「ところでこれ、内側からはどうやって閉めるの？」

壁を見ると、外側のレバーと連動しているような突起があった。

突起――レバーを引き上げる。開いたときと同じように鎖と滑車の音がして、岩が下がっていった。

「なるほど……うまいことできておるのう」

「進んでみましょう」

「おう。――足音、立てるなよ」

抜き足、差し足、忍び足……三人は泥棒にでもなったような気分になった――まあ、海賊船を盗みに行くのだが。

天然の洞窟を改造したらしいこのアジトは、いたるところに鐘乳石の柱があった。

進んでいくにつれ、人工的に造られた空間に出る。

声をひそめてガラフが言った。

「あっちのあの奥、棧橋ではないのかい？ とすると船はあの向こうじゃの」

「ああ、そんな感じだな。——行ってみよう」

ふと、バッツは思った。

このじいさん：記憶は失ってるけど、常識的なことは覚えてるよな。剣の腕も、かなりのものだし。

死の谷を通り抜けた八日間、幾度もゴブリンや殺人蜂に襲われた。

バッツとガラフは、レナを庇いながら魔物達を倒したのだが、ガラフは年老いているとはいえ動きがよく、その太刀筋は、剣の達人であった父ドルガンを彷彿とさせた。

そして、茶目っ気のある豪快さ……。

……ガラフはいつたい、何者なんだろう……？

棧橋を渡りながら、そんなことを考えていた。後にレナとガラフが続く。

——ようやく船に辿り着き、舵のある船尾へ向かう。明りが灯されたままの船を見回しながら、バッツはこの船と普通の船との決定的な違いを見つけた。

帆が、ない——！

バッツの顔から血の気が引いた。

「おい。やばいぜ、この船」

「え？」

「なんでじゃ、バッツ？」

「上を見ろよ」

「あら……帆がないわ」

「でも、それがどうしたんじゃい？」

「カーウェンだったかどっかで耳にしたんだ。双内海で帆のない船には、エルナンドで最高に危険な海賊が乗っている……って」

「じゃ、じゃあ、これがその海賊の船かい！」

「多分な。……通り名が確か……：ファリス・シエルウイズ」

「<sup>シエルウイズ</sup>死神憑き“！”」

物騒な通り名にレナが驚いたその時だった。

「その俺の船に、何の用だ？」

——！！

突然投げかけられた、声の低い女か少年のような、だが冷淡な響きの声。

とっさにバッツとガラフは、レナを背に庇った。

ブーツの踵を鳴らして、黒いコートに身を包んだ二十歳前後の青年が姿を見せる。バッツ達から約三ナーム離れた所で立ち止まった——何が起きてても対処できる距離だ。

値踏みするような目のファリスと視線が交わる。

——バッツは、完全に気圧されていた。いや、気圧されたというよりは、ファリスの凄絶な美しさに途惑ったのだ。

男にしておくにはあまりに惜しすぎる、南エルナンド系の、

中性的——もしくは両性的な美貌。

無造作に束ねられた、腰まで届く癖のある金髪。

海に生きる者とは思えない程に白い肌。

これが：双内海中で恐れられている海賊の頭：!?

だが、意志の強そうな一文字眉の下の深緑色の瞳には、幾つもの修羅場をくぐり抜けた者にしかない、冷たくも激しい光が宿っていた。

「俺の船に無断で乗り込むとは、随分と大胆な奴らだな」

掌が、いつの間にか汗ばんでいた。

そっと、下衣で拭う。

……とにかく、この場を切り抜けなければ：殺される！

バツツはファリスの様子を窺った。

悠然と構えているが、隙が全くない。

腰には剣をさげていた。死神憑きと呼ばれるくらいなら、かなりの使い手とみて間違いないだろう。

体つきは、女のように細身だ。

体格は俺に分がある。……肉弾戦に持ち込めば、勝てる！

低く唸りながらバツツは拳を握り固めた。

力技には自信があった。

こいつを殴り倒して、逃げる！

「うおりゃあ！」

バツツはファリスの顔面めがけて拳を振り上げた。

すい、とファリスが余裕で避ける。

一発目がかわされるのは承知の上。すぐさま左足を軸に回して蹴りを見舞う。が。

しまった、と思ったときには遅かった。ファリスは猛烈な勢いで飛ぶバツツの右足の足首を素早く捉えると、手首を返した。

一瞬、バツツの体が宙に浮く。直後に船の床に叩き付けられるように、うつ伏せの状態で落下した。

「……!!」

口の中に血の味が充満する——衝撃で切ってしまったのだ。すらり。ファリスが剣を抜き、バツツの項に突きつける。

剣が首筋に触れた瞬間、バツツは例えようもない嫌な感じに襲われた。

な：何だ、これは!?

冷たい剣の切っ先が伝える感覚は、強いていえば——瘴気。

「ぐっ！」

左の肘を、踏みつけられる。

「かしらあ！ 侵入者はどこですかい!？」

ばらばらと、海賊達がなだれ込んできた。その数、約二十人。駄目だ……。もう逃げらんぬえ……!!

ファリスはちらりと手下達を見ると、顎でバツツ達を示した。——ファリスは、バツツに向けて言った。

「おまえ達は何者だ？ 何の目的で俺の船に乗り込んだ？」

あんたの船を借りようとした、と言って通用するわけがない。答えられずに黙りこくっていると、ファリスはせせせら笑った。

「答えられないなら当ててやろうか？ 盗もうとしたんだらう。……よっぽど死に急ぎたいらしいな」

そして、冷酷に告げた。

「望み通り、殺してやろう」

ファリスの手に力がこもる。その瞬間。

「やめてっ!!」

ガラフの背に身を潜めていたレナが、意を決したように飛び出した。

慌ててガラフがその白い腕を掴まえる。

「レ、レナ！ こっちへ来ておれ！」

「ガラフ、放して！」

レナはガラフの手を払いのけ、震える華奢な指を組みながら、まっすぐにファリスを見た。

「私はタイクーンの王女、レナリシャルロット。勝手に船を動かそうとしたことはお詫びします。申し訳ありませんでした。」

—— お願いです、風の神殿まで船を貸して下さい！ ……

お父様が…父が危ないの…!!」

バツツが、ガラフが、ファリスを筆頭にする海賊達が耳を疑った。

タイクーン王女!? このレナが、レナリシャルロット姫!?

「おい、聞いたか。タイクーンのお姫様だってよ」

「噂通り、もんのすげえ別嬪だな！」

「……確かに、唾連の乙女“だぜ……”」

「こりゃあ、いい金になるぜえ！」

口々に言い出した賊達に、バツツが制止の声をあげるのと、ガラフがレナを再び背に庇い、叫んだのはほぼ同時だった。

「やめる！」

「この子に手を出すな！」

—— 突然、肘が軽くなった。

ファリスがバツツの肘を押さえていた足を降ろし、剣を鞘に納めた。

ファリスはきびすを返す。

「お頭…?」

「……そいつらを牢にぶち込んでおけ」

それだけ言うと、つかつかと歩き去り、船の階段を降りた。

「待って、お願い……!!」

レナの叫びが、虚しく響き渡った——。

十

後ろ手に縄で縛られて、バツツ達は船内の牢屋に放り込まれた。

賊の一人が、レナを見てにやにやと笑う。

「見ろよ、あのお姫さん。結構イイ体してるぜ」

バツツはレナの前に庇い立ち、賊を睨みつけた。

「よせよ。お頭がそーゆーのを嫌ってんのは知ってるだろ」



「けどよお」

「いいから行くぞ。」

——てめえら、ここでおとなしくしてな。どーせ朝までの命  
だろうけどよ」

牢の木製の扉を閉め、鍵を掛けると、海賊は笑いながら立ち  
去って行った。——いや、一人だけ誰かがいる気配がする。

ガラフが、はあ……と息をもらした。

「まいったのー。いったい誰じゃ！ 海賊船を盗むなどと無謀  
なことを言い出した奴は！」

「……………。じいさん……………あんだだよ」

「うっ…頭が痛い！ 記憶喪失じゃ！」

「まったく、都合のいい記憶喪失だな」

やれやれ、と溜息をつくバツツ。

「それにしても驚いたな…。まさかレナがタイクーンの王女だ  
つたなんて……………道理で見たことがある顔だと思った」

タイクーンの城下街には、いたるところでレナ姫の肖像画が  
売られている。

レナは困ったように眉を下げた。

「隠すつもりはなかったの…。ただ、言い出せなくて……………」

「まあ、『私は王女です』ってふれてまわるワケにはいかない  
だろうしな。……………でも、どうして護衛もつけないで一人で風の  
神殿に？」

「数日前、お父様が風の神殿へ向かったの。ところが、急に風

が止まって……………何か、良くない事が起きようとしている……………消  
えそうなほどに弱まった風霊達の気配が、そう感じさせるのよ」  
タイクーン王族は、精霊に対する感受性が他の王族に比べて  
とりわけ高い。

「……………お父様は城を守れ、と言いつ残して行かれたのだけど、私、  
いてもたってもいられなくなって、ラクールに飛び乗って城を  
抜け出したの。そうしたら、空から隕石が降ってきて……………」

「そうだったのか……………。…よっと」

「バツツ？」

バツツはレナの後ろに回った。

「少し手をあげて。縄を解くから。……………このままじゃあ、シエ  
ルウィズに殺されちゃう」

レナの細い手首に幾重にも巻かれた縄の結び目を、バツツは  
歯でひっぱった。

武器や刃物は総て取り上げられてしまっている。

「ほどけそう？」

「くそっ、かなり固く結んでやがる」

その時。

扉の向こうで、誰かが殴り倒される音がした。

びちんと鍵が外される。

戸口には、三人の男が立っていた——先程レナに欲情を覚え  
た男を含めて。

まずい！

歯が折れそうになるのも構わず、バツツは急いでレナの縄を解いた。

「レナ！ 早く俺の縄を解け！」

「おおっと、そーはいかねえなあ」

男の一人がバツツの胸倉を掴みあげて頬を殴る。

「ぐはっ！」

そのまま男に馬乗りされて、動きを封じられた。

さっきの男が牢の扉を閉めると、レナを引きずり寄せて服を一気に引き裂く。

「い、いやああ——ッ!!」

レナを押し倒しながら、まろび出た豊かな乳房を握り締め、足を大きく開かせた。

ガラフがレナを押し倒した男の背を力まかせに蹴りつける。

「やめんかい、この下郎！」

「ずいぶんと威勢のいいジイさんだなあ。…あらよっと！」

「ぐうっ……！」

残りの男の膝がガラフの鳩尾に入る。ガラフはそのまま昏倒した。

「離せっ！ 無礼者！ い…やああああ——ッ!!」

レナの腕を左手で束ねて押さえつけ、右手で股の付け根をまさぐる。男が乳房の中央の桜色の塊を舌で舐めがす頃には、レナの双眸からは大粒の涙が溜まることなく流れていた。

「やめろっ！ やめろっ!!」

「うるせー小僧だな。どーせこのお姫さんは、どっかの娼館で客をとるようになるんだからよ。——ニコ。二番目は俺だけ」

ニコと呼ばれた男はレナの肌着の間から指を差し入れる。

「お？ このお姫さん、処女じゃねーぞ。最近の王女サマは進んでんなあ」

ニコが腰帯を解き、獣の咆哮を訴えている下半身を露出させた。

——刹那。

バタンっ！

ファリスが、扉を蹴り開けて牢の中に入ってきた。

その手には小型の拳銃が握られていた。

銃口を、ニコの額に向ける。

三人の男達の動きが、一瞬にして凍りついた。

「…その汚えモンを、とっととしまいな」

「…お…おかしら……」

ニコが、ひきつった笑いを浮かべてファリスに媚びた。

「先、どうです？」

パァンッ!!

銃口が火を吹いた。

「ひっ……！」

ニコの頬の皮一枚をかすった銃弾が、床にめり込む。ファリスの全身から、怒りの気がほとばしった。

「……俺を…本気で怒らせたいのか……!？」

三人はおろか、バツ達までもが鳥肌を立てる程の迫力。

「すつ、すいやせんでしたあつ！」

ニコ達がわたたと慌てふためき牢から飛び出して行った。

——ファリスは自分のコートを脱ぎながら、レナに近づいた。

レナは怯えて後退り、腕で体を隠す。

しかしファリスは、コートでレナを包み込むと、

「怖い思いをさせて、すまなかったな」

そう言つて、優しい眼差しでレナを見つめた。

レナは黒いコートを胸元でかきあわせた。

「あ……ありがとうございます……」

……しばらくの間、レナとファリスは見つめあつていた。

甘やかな雰囲気さえも感じさせる、穏やかな沈黙。

同じ色の瞳が、互いの瞳に映る。

「あなたは……誰……？」

レナの問いに、ファリスは小さく笑つた。

「海賊の親分さ。——それより、明日、風の神殿へ向かうぞ」

「……えっ？ どうして……？」

「力を貸してやると言つてるんだ。海賊の好意は素直に受け取

つておくもんだぜ？」

ファリスは、ぼんと軽くレナの頭を叩いた。

「おい、ファリス。いま、銃声がしなかったか？」

「イールセン」

顔をのぞかせた三十代後半の片目の男が、レナに目を留める。

途端、顔をしかめた。

「まあたニコ達か。……たく、あいつら素人娘に目がねーから

なあ」

「イール。お姫さん達に、もちつとマシな部屋を用意してくれ。

特にお姫さんには、しっかりと鍵のかかる部屋を、な。それから小僧と同じさんの縄を解いてやれ」

「あいよ、お頭。しかし、どういふ風のふきまわしだい？」

「いつものきまぐれさ」

肩をすくめながら事も無げに言うと、ファリスは立ち上がり、

軽くレナに目をやつて、

「安心しな、イールは信頼できる男だから。……じゃ、おやすみ。

ゆっくり眠れよ」

そのまま、牢から歩き去つた。

「ファリス……」

立ち去るファリスの細い後ろ姿を、レナはずっと、見つめて

いた……。

——イールセンが、盛大な溜息をついた。

「つくづく女泣かせな奴だよなあ、ウチのお頭は」

十

あてがわれた船の部屋のベッドの上で、バツは閉じていた目を開いた。

「ガラフ、起きてるか？」

隣のベッドに寝ていたガラフは、ややあつてから高らかないびきで返答した。

「……」

バツツは身を起こした。

あのファリスって奴、本当に信用していいんだろうか……？

いくら強姦されかかったレナを助けたとはいえ、海賊の頭領である。何か企んでいるのでは……とバツツが勘繰るのも無理はない。

だが。

あの、レナを見る眼差しはいったい何であつたのだろうか？

「——ま、考えても仕方ねえか……」

再び、バツツは横になる。

風の神殿へ向かうためには、取りあえず、あの男を信用する以外に良い方法がなかった。

別の部屋。

レナもまた、寝つけずにいた。

ファリスのあの瞳。

私と同じ、深緑色のあの瞳は……あの、眼差しは……。

レナは、遠い記憶を手繰り寄せる。

彼女に、似ている——。

十

「いつまで寝てんだあ？」

呆れたようなファリスの声で、バツツは目を覚ました。が、

「んー……、あと四半刻……」

「ウチの野郎共、食欲すごいからな。おまえの分の飯、なくなるぞ」

がばり。バツツが飛び起きた。

ファリスの大笑いにガラフの高笑いを重ねる。

「小僧、二つ（約四分）で仕度して、上に来な」

——バツツはカチンときて、ねぼけた頭がはつきり覚めた。

「……おまえ、昨日から俺を小僧呼びわりしてるけど、おまえはいったい何歳なんだ？ 今日で二十歳になる俺より年上なんだろうな!？」

ファリスは涼しげな顔をして言った。

「そりやおめでとさん。今日でやっと俺と同年だな」

「くっそ。たった数ヶ月の差じゃねーかよ」

しかし、数ヶ月とはいえバツツより年上（月上？）であることは確かである。

負けたような気がして、バツツはふてくされた。

「そーゆーところが『小僧』なんじゃよ、おまえさんは」

「ガラフ！ ……たたくもこいつもこいつも」

「あと一つ半でおまえの飯がなくなるぜ」

「あーわかったよ。小僧でもカルナック象でも好きに呼べ！」

甲板に出ると、レナが髪の短い女とヨーグルトを食べながら和気あいあいと話していた。

「美味しい！ これもラウラさんの手造り？」

「そ。結構いけるでしょ」

「ラウラさんって、料理が上手なのね」

「正直だねえ、レナちゃんって」

「——たまたに腹壊すよーなモン作るけどな」

「ファリス！ 一つの話だ！」

茶化したファリスにラウラは嘸みつくように叫んだ。

「四年前の夏と三年前の春と秋、二年前の冬に去年の夏と今年の始め。それに加えて二カ月前」

「……どうもありがとうって言いたくなるくらいの記憶力だね、あんたって奴は」

あはは、とファリスが笑う。

「どーいたしまして、と言ってやるよ。……それよりラウラ、そのカルナック象に餌えさやってくれ」

「カルナック象？」

「こいつのことじゃよ」

つい、とガラフがバツツを差し出す。

ラウラはまじまじとバツツを見た。

「あんた、象並みに食うの？ そんなに残ってないよ」

途端、ファリスとガラフはもちろんのこと、レナやまわりの海賊達まで笑い出した。

……畜生。ここまで笑いの種にされたのは生まれて初めてだぞ。黙っているのも癪にさわったバツツは、思い切り居直った。

「おう、そーとも。俺あ象より食うぞ」

ぼんぼん。ラウラがバツツの肩を叩く。

「気に入った！ あんたのために超豪華な朝飯作ってくるから、ちよいと待ってな」

はち切れんばかりに盛り上がった胸の膨らみが、ぶるんと揺れた。

で……でけえ……。

「おまえ、完璧に地雷、踏んだな」

横にいた黒と金のまだら髪の青年——カレルが、ぼそつと言った。

「地雷って……」

「あいつの『超豪華な朝飯』は、半端じゃなく超豪華だ。

ただし。質じゃなく、量が、な」

……かくしてバツツは、十人前は優に超えてる『超豪華な』量の朝食を前に、悪戦苦闘することになったのである——。

死ぬ思いでバツツが朝食をたいらげた頃、レナがファリスに尋ねた。

「この船、風もないのに、どうやって動いているの？」

ニっと、ファリスが笑った。

「知りたいか!?」

真剣に頷くレナ。

「ええ」

「じゃあ教えてやろう」

ファリスはやや薄めの唇に指をはさんで、高い口笛を吹いた。すると…。

「な、何!?」

船が、ぐらぐらと揺れ出した。と、同時に、船首の前の海面が盛り上がり、……白い大きな竜が顔を出した!

ファアオ!

驚いたレナが思わずファリスにしがみつく。

ガラフも驚きのあまり腰を抜かしかけ、バツツに至ってはさつき食べた朝食を戻しかけた。

「こ…これ、もしかして双内海の主…伝説の海竜!?」

「——らしいな。」

シルドラ! お姫さん達に挨拶しな!!

ファアオ、ファアオ!!

シルドラは長い首を伸ばしてレナ達におじぎする。

「よろしく、って言ってるぞ。」

…おい!

「へい!」

目でファリスに促された海賊達が海に飛び込み、シルドラの胴に巻かれた、蛟のなめし皮で作られたベルトに鎖をはめ、船と海竜を繋いだ。

「な、何で伝説の魔竜とおまえが……」

口元を手で覆い、吐き気を堪えながら問うたバツツに、

「五年前に海でナンバされたのさ」

ファリスは軽く笑って言った。

……魔竜にナンバされたって……マジかよ。

「かしらあ、準備はいいですぜ!」

「よし、一緒に行きたい者だけついてこい。」

——ラウラ。ハーネイダムに帰るんなら、送っていくぞ?」

ラウラはかぶりを振って船から降りた。

「あたし、実は母さんと大喧嘩しちゃったんだよね。もう少し

南エルナンドで遊んでるよ」

ファリスが吹き出した。

「相変わらずな、おまえら母娘は」

と。アジトに残る賊の一人が「おかしら!」と叫びながらやってきた。

「どうしたユベール?」

「アジトの入口に、なんかヒヨコをでっかくしたような鳥……」

そうそう……チョコボと、白い馬が血だらけで倒れてるんすよ!」

バツとレナは顔を見あわせた。

「ボコとラクールだわ！」

「あいつら、俺達の後を追って洞窟に入ったのか!？」

岩の仕掛けがある辺りで、ボコとラクールはぐったりとしていた。

「どうやら、<sup>ステイールバット</sup>吸血コウモリにやられたらしいな」

ファリスがボコ達の傷の具合を見ながらそう言った。

「ステイールバット!? 何でそんな物騒なコウモリが……」

「こちら辺の洞窟には大概いるんだ。……おまえらは遭遇しなかったのか? よっぽど運がよかったんだな」

例によってレナがボコとラクールにケアルをかける。が。

「どうじゃ、良くなりそうか?」

「駄目。傷は大したことないのだけど、この子達、貧血がひどくて……。ねえ、ファリス。安全な場所で休ませてあげたいの。」

「場所を貸してくれる?」

ファリスは快諾した。

「カレル、エステルじいさんと呼んできてくれ。あんたの大好きなケガ人があるぞ、ってな」

——ややしてカレルは紫色のローブを纏った百歳近い老人を連れてきた。

「おお、こりやまた随分とでっかいケガ人じゃ。よしよし、

奥まで歩けそうかの? ……何じゃ、無理か。仕方ない。お頭、子分達を呼んで運んでおくれ」

……不安だ……なんか不安だ。

こっそりと、バツはファリスに尋ねた。

「……このじいさん、大丈夫なのか?」

「ああ。棺桶に片足どころか両足つつこんでもくたばらない、

ケガ人や病人の世話が何よりの生き甲斐なじいさんさ」

「そうじゃそうじゃ。わしに任せておけば安心じゃ!」

バツとレナは、ボコとラクールを老人に頼むと、ガラフやファリス達と共に船へ戻った。

「渡り板を外せ。錨を揚げる! イール、舵はおまえが取れ」

ファリスの伝令の声が飛ぶ。

シャアアアーン……

出航の銅鑼が打ち鳴らされる。

ファア——オ!

シルドラの鳴き声がアジトの中に響き渡る。

ゆつくりと、海賊船が動き出した。

遙か北の、風の神殿を目指して——。